

# 東京バッハ合唱団 月報

[第554号] 2008年8月

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732  
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.554

August 2008

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

東京バッハ合唱団 創立46周年記念懇親会 講演

## 関係のなかで生かされて在る いのち

上村 静

現代日本社会における諸問題の一因は、自己の存在肯定の絶対根拠の喪失にあると思われる。「勝ち組・負け組」といった空虚な言葉が流布し、「普通」でいるよう無言の圧力をかけられ、また「自己実現」せねばならないという焦燥感のなかにある社会生活は、他者との比較による自己確認を求める心性を人びとに強いている。その結果、「普通」以上であると思う者にエゴイズムを、「普通」以下であると嘆く者にニヒリズムを生む。また、「普通」であることに固着し、「普通」でないで見なした者への優越による安心感、「普通」でないで見なされた者の仲間と見られることへの恐怖、自分より下の者の存在による歪んだ優越感がさまざまなレベルでの差別やいじめを生んでいる。差別は連鎖的である。弱者はより弱い者を差別することで自己確認する。

人生に勝ち負けなどあるわけもなく、財産や学歴や職業は人に付着している属性に過ぎない。実体として「普通」の人などいない。だれにでもそれぞれの個性があり、異なる環境があり、異なる経験、異なる人生がある。すべての人は異(い)なる者である。「自己実現」という言葉も少なからぬ若者たちに誤解されているように見える。自分にしかできないこと=他人と違うことをすること、と勘違いしている。初めから人はだれも他者と同じ人生を歩むことはできないのだから、自己実現とは与えられた自分のいのちを十全に生きるということではない。何をやるかではなく、何をしようがしまいがいのちが充実しているかどうかの問題なのである。

これらの諸問題は、イメージを実体と錯覚し、そのイメージに執着することで本来の自己を喪失してしまうことに起因する。だが、ひとりひとは、その存在そのものがあるのままで肯定されているのである。「ありのまま」という言葉も誤解されがちである。「ありのままで肯定されている」と言っても、すべての人が何もしないで生存できるわけではない。食うためには働かなければならないし、充実した生を送るためには他者との競争を媒介にした自己鍛錬が必要なこともある。けれども、それは人間存在の一面でしかないのだ。「ありのまま」とは一人の人間存在の全体、ありとあらゆる多面体からなる人生の全体、失敗もあれば成功もあり、楽しいときもあれば悲しいときもあり、優しいときもあれば怒ることもある、そして多くの人とのかかわり合いのなかにあって互いに生かし生かされて在る、そ

ういう全体がひとりの人の現実なのであって、その現実が「ありのまま」でまず根源的に肯定されているということだ。「ひとりの人」と言ったが、そもそも人は独りでは生きられないのであるから、本当は実体として「ひとり」なわけですらなく、他者との関係のなかの一部なのである。また現実が「ありのまま」で肯定されているというのは、現

### 東京バッハ合唱団 創立46周年記念懇親会

2008年7月7日 18:30~21:00 目白聖公会

今年の創立記念日は、主宰者の発案で、カンタータのテクトにあるキリスト教の死生観を、いちどゆっくり考え、空虚で通り一遍でない内容把握のもとに演奏したい、ということから、あえて『地獄と天国』というポピュラーなタイトルで、講演と話し合いを企画しました。

宗教音楽を専門にうたう他の合唱団のなかには、団員の教会所属を入団資格とするようなところもありますが、当合唱団はキリスト教伝道の意図すらなく、「あらゆる人間に普遍的に訴えるバッハの音楽」に共鳴する合唱団です。18世紀ドイツの時代的制約はあるものの、それをのり越えたバッハの音楽の真実を、ひろく深く追求してゆくために、バッハにとっても、良かれ悪しかれ大きな枠となっていた宗教というものを、ひごろから注意深く見きわめてゆく必要があると思っています。

これまでたびたび、こちらの要望にこころよく応じて、月報にすばらしいご寄稿をいただいていた、上村静氏(合唱団の年齢よりもお若く、1966年生まれとのこと。合唱団は1962年7月1日発足)に、初めて実際にお目にかかり、『関係のなかで生かされて在る いのち』と題する、すばらしい講演をうかがいました。あらかじめご準備されたレジュメにそって、随時補足をくわえながら、お話がすすめられました。

前後に会食やバザーもふくまれる、多忙な内容の会でしたが、全員でカンタータ169番の最終コーラル 主の愛よわれらにも熱き思いたまえを歌って、終わりました。

出席者は、後援会員の青木道彦、大塚剛宏、黒田みつ子の各氏、先の月報を読んで参加を申し込まれた郷右近タエ様、および団員20数名ほど。もっとPRして多くの方の参加をいただきたかったと、少し残念でした。

(大村恵美子)

状がそのまま放置されていてよいということではない。個人にせよ社会体制にせよ、さまざまな問題があるだろう。自己を見失って厭世的に生きている人がそのままでもいいわけではないし、社会によって抑圧されている人が抑圧状態のままに置かれていていいわけでもない。それは変革されねばならない。しかし、全人格としての人間存在が「ありのまま」に肯定されて在るという絶対根拠があつてはじめて自己を見つめ直すことができるのであるし、また根源的な社会変革の根拠と方向性も見えてくるのだと思う。

他者との「比較」という言い方も誤解されるかもしれない。すでに触れたように、充実した生のためには他者との比較・競争が必要なことはある。しかしそれはあくまでも与えられた能力の一面を鍛えるためになされる比較なのであって、それによって自己の全人格が価値評価されるわけではない。むしろ、まず自己肯定の絶対根拠があつて、その上で競争するからこそ能力の向上が得られるのである。この根拠があればこそ、勝っても負けても傲ることも自己否定することもない鍛錬となるのだ。多くの優秀なスポーツ選手は試合の後に周りの人への感謝を述べるが、それは苦しい練習を乗り越えられたことが多くの人の支えによること、自分が生かされて在ることを実感として知っているからである。自己の存在肯定の絶対根拠を欠いてなされる比較・競争は、その勝ち負けが全人格的な優劣であるかのような誤解を生み、人をエゴイズムないしニヒリズムへと落ち込ませてしまう。現代は国家機構や大企業による社会的エゴイズムが暴力をむき出しにし、その暴力に晒された個人は自他の繋がりを見失い、いのちを喪失し、その結果、自他を傷つけてしまっている。

連日マス・メディアをとおして事件・事故が報道され、われわれは日々多くの「死」を聞かされている。それにもかかわらず現代社会では死は隠蔽されている。そのためいのちもまた見失われがちである。なぜなら、いのちと死とは相関関係にあるからである。いのちがなければ死はありえず、死がなければ生きるということもなくなる。人はだれしも死すべき宿命(さだめ)にあり、それがいつ訪れるかはわからない。そのことはだれでも知っていることであるが、多くの場合、死は忘却されている。そのため人生の時が限られていることをも忘れてしまう。時間は同じように流れていて、昨日の今日、今日の明日と毎日を日常に忙殺されて過ごしてしまう。けれども、時が流れているということは、われわれが現実生きているのは常に今という瞬間だけだということである。昨日や明日を生きることはできない。それはあくまでイメージのなかにあるのであって、生きている現実のものではない。しかし、人はしばしば自分の過去や未来のイメージに執着し、今を見失ってしまう。過去になにか大きな出来事を体験した場合、現在の自分がそれに規定されていると錯覚してしまうということがある。過去に嫌なことがあつた場合、そのことに執着して現在の自分を見失ってしまうということがある。こうして今を生きられずにいるがゆえに現在の自分に不満が生じるのだが、それ

を過去のせいだと思っているので、ますます過去のことばかり考えて陰鬱な日々を送ってしまうということがある。逆に過去になにか素晴らしい体験があつた場合にも、いつまでもそれを想起することに固着し、現在の自分はもはや過去の自分ではないはずなのに、そのイメージにしがみついて新しく生きることをしないということがある。宗教体験はその人の人生を変える大きな出来事であり得るが、それに執着すると再びエゴの餌食となる。その体験は、それを体験したときにはその人を新しくしてくれるのだが、それは決して今の自己をいつまでも新しくし続けてはくれない。日々新しく生まれなければならないはずなのだ。しかし、往々にして少なからぬ信仰者は、あの体験にしがみついてしまう。こうして過去の体験がエゴとなり、それに基づく「信仰」を絶対化してしまう。確かに過去なしに現在はないし、過去を消し去ることも、きれいさっぱり忘却することもできないが、過去に執着して後ろを向いて時を過ごすならば、今を生きることはできない。それは現実のいのちの喪失なのである。いったん過去を断ち切って、前を向いて今を生きることで、逆に過去の体験をも含めた自分の全人格を受け入れられるのである。将来のイメージに執着する場合にも同じことが起こる。将来に不安を感じることはしばしばあるが、そのことばかり考えていたのでは、結局ろくな将来は訪れない。今を生きることで将来もまた切り開かれるのだ。死はなにかしら怖ろしいものであるけれど、しかし死を受け入れることで、却っていのちは十全に生かされるのである。

死との相関は、自分のいのちに限られるわけではない。あらゆるいのちは、他者のいのちを奪うことによってしか生きながらえることができない。人は他の動植物のいのちを食し、その死によって生かされている。現代社会ではその死が隠蔽されているため、そのいのちは暴力的に殺害されているが、それだけではない。人は他者とのかわり合いの中でしか生きられないのであるから、実は他者の人生の一部を奪つてもいるのだ。そして自分もまた自分のいのちを差し出して他者を生かしてもいるのである。実際、われわれの日常生活は名前も顔も知らない無数の人に支えられ、名前を与えられることすらない動植物のいのちによって生かされている。たとえ目に見えてなにか特別に他人のお世話になっていなかろうが、あるいは他人様のお役に立っているという自覚がなかろうが、いのちある者としての存在は、それだけで生かされている者であると同時に生かす者でもあるのだ。だからこそ、与えられたいのちを十全に生きること、生の歓喜と悲哀を大いに享受することが、生かされて在る自らのいのちを生かし、また他者のいのちをも生かすことであるし、それが生きるということであろう。誤解のないように繰り返しておくが、それはなにか特別なことをして生きるということではなく、たとえ寝たきりであってもいのちを感じて生きること、否、仮に本人が感じられない場合でも周りの人がそのいのちを感じられること、すなわちいのちある者として在ること、それだけですでに十全なのである。そのこと

に気づくならば、自己と他者のいのちのためにできることを存分に行えばよいのである。それぞれが、それぞれの仕方でも自他のために生きること、それがいのちを十全に生きるということだ。

死は隠蔽されていると言ったが、しかしいつかはだれでも愛する者の「死」、そして自らの「死」と向き合わねばならないときが来るだろう。けれどもすでに述べたように、われわれが現実には生きていられるのは今という瞬間だけであり、過去の自分は二度と戻ってこない。とはすなわち、われわれは一瞬一瞬死んでいるのであり、そして絶え間なくその都度再生しているのである。それは自覚されていないだけのことである。では、自覚される「死」、「肉体の死」はなんであるか、それは再生しないではないか、と言われるかもしれない。けれども、それはまさに「自覚」される「死」であるがゆえに、自我の死なのだ。「自我」(=エゴ)とは「私」という意識であり、「肉体の死」とは「私の生命」の死である。「私の生命」と思われているものは、「自我」がそのように認識しているものであるが、いのちの関係のなかで生かされて在るのだから、「私の生命」というものも実はいのちの一部を自我が分節化したものに過ぎない。人が独りで存在できない以上、独立して存在しているかのように見えている「私の生命」なるものも実体ではないのだ。「私の生命」は「私のいのち」の一部に過ぎず、「私のいのち」はありとあらゆるいのちの一部である。肉体の死は「私の生命」の死ではあるが、自我が「私の生命」と思いこんでいる「私のいのち」は、肉体の死=自我の死によって「私の」ものでなくなるだけであって、いのちそのものはなお大なるいのちの関係のなかで生き続けるのである。古代ユダヤ教は前二世紀のユダヤ教弾圧という出来事を契機に終末論的な「復活」と「永遠の生命」という希望を生み出し、それについての思弁を発展させてきたし、キリスト教もそれを受け継いでいるが、それは「私の生命」が永遠であることの希望である。それは自我に支配された「生命」への欲求であり、それゆえに滅びるべき他者の存在を要求する。「永遠の生命」への希望とは、倫理的に救われる者と滅びる者とを分ける二元論的人間観の延長線上にあり、それ自体、実はエゴイズムの表現である。けれども、いのちは初めから永遠だったのだ。いのちの関係のなかで生かされて在るのであり、関係は実在ではないがゆえに、死ぬこともない。いつか地上から「ヒト」という生命体がいなくなるときが来るだろうし、地球そのものも永遠ではない。けれども、それは「～の生命」がなくなり、認識されるということがなくなるだけで、なおいのちの関係のなかで生かされ続ける、そういうものだと思う。

いのちについて語り尽くすことはできないが、それは人間存在肯定の絶対根拠でありうるだろう。古来、人間はこの洞察をさまざまな仕方でも語り伝えようとしてきた。文学や哲学、音楽や芸術がそれであり、宗教もそのひとつである。「倫理」は違う。倫理は社会的文化的合意に基づ

くのであって、それ自体に絶対根拠を持たない。倫理の根拠もいのちについての洞察であり、いのちの状況、個々の現実には常に変化し続けるものであるから、倫理は刹那のものでしかない。それゆえ倫理をそれ自体として絶対化すると、自他のいのちを損なうことになる。現代世界において相も変わらずいのちが奪われ続けている以上、宗教にもまだまだ果たすべき役割がある。失われたいのちを回復しなければならない。宗教は、個人レベル、社会レベルでのエゴイズム・ニヒリズムを克服するクスリとなりうるだろう。

「クスリ」と書いたが、厳密にはいのちについての洞察、宗教心と呼びうるものが「薬」であり、その形状が宗教であると喩えられるだろう。文学や哲学や芸術も「薬」の異なる形状であるが、薬効の異なることもある(恋の薬だったり、失恋の薬だったり)。諸宗教の違いは、オブラートだったり錠剤だったり飲み薬だったりといった形状の違いに過ぎない。キリスト教は神とキリストという超越の象徴に対する人間の側の信仰を、ユダヤ教は神とトーラーという超越の象徴に対する人間の側の契約遵守を、イスラム教は神とクルアーン(コーラン)という超越の象徴に対する人間の側の戒律遵守を、仏教はダルマ(ダンマ)と縁起という超越の象徴に対する人間の側の悟りを救済とする。いずれも現実の人間存在の受動的在り様とそれにもかかわらず肯定されて在る現実、またそれに対する人間の側の応答をそれぞれの文化的規範に基づいて別様の仕方でも表現したものであり、根幹にあるのは関係のなかで生かされて在るいのちについての洞察と畏敬である。この「薬」の効能は、エゴイズム・ニヒリズムの克服にある。

もっとも、完全にエゴイズムを克服しきるといえることは、ごく一部の宗教家を除いて、日常に忙殺されざるを得ない多くの人にとっては困難であるし、その必要もないだろう。全人類が悟りきった坊主の集まりになることは不可能だし、そんな世界は味も素っ気もない。多少のエゴイスティックな面はだれにでもあるのであって、それは人生の味わいのようなものだ。けれども、それに執着することは自分にとっても他者にとっても大きな問題を引き起こすことになる。「かかったかな?」と思ったときに飲むのが「クスリ」であるように、なんらかの思いに執着し始めたとき、傷ついたとき、いのちが損なわれそうになったときに服用するのが宗教であり、かかりつけの病院があった方が安心できるように、かかりつけの宗教を持つておくのが特定の宗教団体への所属ということであろう。多くの宗教は定期的に集会を持つが、それは健康診断のようなもので、日常に忙殺され、また長い生涯における状況変化のなかでエゴイズムに陥らないよう、いのちについての洞察を繰り返し再確認するという意味がある。

一般に患者はクスリの成分などよく知らずに、処方されたクスリを言われたとおりに飲む。そうすると、なぜかは知らないが回復する。宗教の表象も同じで、神話や聖書を

文字通り信じ込み、教えられた儀礼を手順に則って実践することで、いのちについての洞察を自分のものとしてすることができる。一般信徒は学者ではないし、またそうある必要もないから、患者が医師の指示に従うように、一般信徒は宗教指導者に従うものだろう。よい指導者に恵まれれば、適切な投薬によって健康を保つことができる。

しかし、どんな良薬も一度に大量に飲めば副作用が起こるし、依存症に陥ることもある。エゴイズムを克服するための宗教が、却ってエゴイズムの元になる。依存症になると副作用に気づかずに飲み続けてしまう。こうなると自他のいのちを奪ってなおそれに気づかないということになる。こういう場合は主治医がいったんクスリを止めさせるべきなのだが、自らすでに依存症になっているヤブ医者もいる。ヤブ医者はそのクスリさえ飲んでいけば大丈夫と思いきみ、さらに投与し続けたりしてしまう。しかも、ヤブ医者は「薬」の成分をわかっておらず、その形状に薬効があると思いきんでいる。オプラートじゃないとダメだ、錠剤は毒だなどと思いきんでいる。個々の宗教はいのちについての洞察に異なる表象を与えているに過ぎないのだが、表象を絶対化してしまうと宗教エゴに陥る。こうして宗教間の争いが生まれる。エゴイズムを克服するための宗教は、自らがエゴイズムをむき出しにしてしまう。しかし、本来宗教は他者に対して開かれたもので、宗教間で—あるいは自然科学のような他の諸分野とも—認めあうことは宗教の本質に属するはずなのだ。

それゆえ宗教指導者の責任は重い。自らのエゴイズムに信徒たちを巻き込んでほしくない。さらに、現代の患者は自分でクスリの成分を調べることもできる。ヤブ医者ばかりの古びた病院は患者から見放されてしまう。いつまでも陳腐化した時代遅れの表象にこだわりその内実を伝えられない宗教は、やがて信徒から見放されてしまうだろう。実際、日本におけるキリスト者人口は減り続けている。特に若年層の減少は著しい。彼らが健康ならそれでもいいが、スピリチュアル・ブームに見られるように需要はむしろ増えている。このことは、古びたキリスト神話がもはや服用に堪えないことを意味している。もはやオプラートがほとんど使われなくなっているように、そろそろ飲みやすいカプセルに薬を入れ替える時期が来ているのではなからうか。

キリスト教と現代とのかかわりからもうひとつ触れておきたい。キリスト教は「罪の赦し」を宣べ伝える。それは、人間の自己義認の不可能性と他力救済、すなわち人間存在の相対性とそれにもかかわらず肯定されていることの古代ユダヤ教神話の表現であるが、これが実体化されるとあらゆる犯罪が容認されるかのような誤解が生まれる可能性がある。キリスト教の言う「罪」が「宗教的な罪・根源的な罪」で、いわゆる「犯罪」と区別されるというわけではない。「根源的な罪」とはエゴイズムのことであり、犯罪は行為によって顕在化したエゴイズムである。もっとも、犯罪ということでは必ずしも国家の定めた法律への違

反を意味しているわけでもない。国家法は常に妥当であるとは言えないし、国家機構や社会組織が合法的にいのちを奪うことは日常茶飯事である。国家から見た「健全さ」を欠く者—「日本国民」でない「在日」「外国人労働者」「難民申請者」「国民」であるはずのホームレス、障害者、精神病患者、囚人など—は、「非国民」として人権を剥奪されている。それは国家の犯罪である。いのちを守るためにこうした国家機構や社会組織に抗わねばならないときもある。それは国家からは「犯罪」と見なされるとしても犯罪ではない。犯罪とは他者のいのちを殺す行為であるが、「罪の赦し」とはその行為を赦して、その犯罪をなかったことにするわけではない。その責は負われねばならないし、その償いはなされねばならない。そうではなくて、「罪の赦し」とは、犯罪ゆえにその人の全人格、人生の歩みすべて、その人のいのちが全否定されるわけではないということ象徴的に表現しているのである。犯罪がエゴイズムに起因するということは、その人はすでに自己のいのちを喪失していたのである。だからまず、その人の存在を肯定し、いのちを回復する必要がある。そうやって初めて、自らの犯罪を自覚し、その責を負い償うということが可能になるだろう。

もうひとつ。いのちという言葉を繰り返し使っているが、これもまた象徴的な表象の一つに過ぎないのであって、実体化・絶対化されてはならない。「生命」の絶対化はいのちを損なうことがある。いくつかのキリスト教諸派は、「生命」を絶対視し、中絶禁止法を作るよう各国に働きかけている。たしかに中絶はなされない方が好ましいが、しかしひとりひとりの母体にはそれぞれの現実があり事情がある。そうした個々の状況を無視して国家権力で無理やり禁止することは、母体のいのちを殺すことに繋がる。そんな国家法を作るよりも、中絶をしなくてすむ社会を構築すべきであるし、禁止するなら戦争や武器の製造、軍隊・軍事基地の存在の方が先であろう。また、最近では延命治療・措置の停止に国家が介入することによって死ぬに死ねない状況も生じている。しかし、ひとりひとりの人生が異なるように同じ「死」の形はあり得ない。であれば、あらかじめどのように死ぬかを決めておくことなどできないことも多いはずだ。最期の在り方は、本人と身近な人と医者など患者と関係のある人—だれが関係者かもあらかじめ決められるわけではない—が決断することであって、役人が決めることではない。国家には人の「死」に介入する権利はない。いのちは関係のなかで生かされてあるものなのだから、「生命」の「死」が関係のなかで迎えられることで、そのいのちは十全に生きられることになるだろうし、そうして安らかに大いなる永遠のいのちのなかへと戻っていけるだろう。(2008年7月7日、目白聖公会)

(うえむら・しずか、大学講師・聖書学専攻、団友)

上村氏には、月報533号(2006年11月)に「宗教の倒錯—キリスト教の場合」を、月報551号(2008年5月)に「復活」と「永遠の生命」への希望「私の生命」と「大いなるいのち」を、それぞれ執筆いただいています。あわせてご参照ください。



ベルリン シュルキューター宮殿での演奏会  
1983年8月13日(土) 第1回ドイツ/ヨーロッパ演奏旅行



アイゼナハのバッハが洗礼を受けたゲオルク教会での演奏会  
1988年8月19日(金) 第2回ドイツ演奏旅行



ポツダム、救世主教会での演奏会  
1993年8月15日(日)17時 第3回ドイツ演奏旅行

## 第5回ヨーロッパ演奏旅行

資金募金の目標額 300万円

6月21日の第102回定期演奏会プログラムにチラシを同封して、2009年8月の演奏旅行に関する参加団員募集と資金募金の呼びかけをしました。

現在までに、さっそくのご寄付と、戸田敏子様(団友)、中澤富士子様(後援会員)他からバザー提供品をたくさんいただきました。

バザーは練習時につづけますので、いつでもよろこんでご提供をお受けいたします。

〔旅行資金応募〕11名、合計162,000円(7月11日現在)

## 2008年度団員総会の報告と50周年企画

6月28日(土)、桜新町の練習会場(世田谷中央教会)において、新年度の団員総会があり、2007年度の活動報告・収支報告と2008年度の活動計画・予算案とがそれぞれ承認されました(議事進行はB戸川さん、書記はS八巻さんとS中村さん)。

2008年度の演奏活動(今夏~2009年夏)については、本紙次頁の「合唱団、夏以降のスケジュール」に詳細が掲載されています。

創立50周年記念企画(2011年~2013年)

当合唱団の創立50周年は、2012年をはさむ前後3カ年間に記念企画を実施することとし、中心となる演奏計画については、下記のとおり報告があり、承認されました。

2009年 105定期 BWV111, 170, 124, 248

2010年 106定期 BWV125, 199, 85, 17

107定期 BWV 64, 190, 196, 248

創立50周年記念企画(2011年~2013年)

2011年 108定期 《ヨハネ受難曲》

109定期 《クリスマス・オラトリオ》(248 - 中心)

2012年 110定期 《マタイ受難曲》

111定期 《クリスマス・オラトリオ》(248 - 中心)

2013年 112定期 《ミサ曲口短調》

バッハファン・合唱ファンの皆様、OB・OGの皆様

ご覧のとおり、大曲が目白押しですが、無理なく消化してゆけるよう、選曲委員の方々の周到な配慮がなされているようです。

記念企画の中心には、現役団員の大多数が昨年3月の創立45周年記念公演を経験している《マタイ受難曲》が据えられました。

1992年以後の再演となる《ヨハネ受難曲》のためには、直前の第107定期の時期を早め、たっぷりの練習期間を確保したいと考えています。また《クリスマス・オラトリオ》は経験者が多数いますが、本年末演奏のBWV214に第部、部の各冒頭合唱の原曲があり、かつ105定期、107定期でもあらかじめ取り上げるので、充分円熟した演奏をお聞かせすることができるでしょう。

最後の《ミサ曲口短調》(最近では2002年上演)のためには、2013年のほぼ丸一年が準備に費やされることになるはずで、

というわけで、今から参加のご計画をお立てください。

## 第 103 回定期演奏会

“クリスマスに、カンタータの4つの贈り物”

# 貧しさに生きる

大村 恵美子

本来、人間は貧しい存在である。他の動物とくらべ、世に生まれでてから、外界の危害を避け、自立して過ごせるようになるまで、どれほど長い庇護が必要なことだろう。また、老いて身体をあやつれなくなり、寿命をまっとうするまで、これまたどれほど多くの人たちが、長い間、社会的介護をうけることだろう。自律・自由に徹して人生をいとなむのは、意外に短期間であり、そのあいだにも、それぞれ家族に制約され、職場への義務にしばられ、また単身で暮らしても、衣・食・住において必ず他者との折り合いに労力を費やされる。

今や地球は一つになり、どんなに富める国に住んでいても、同じような欲求をもって台頭してくる多数の新興国の運命にかかわらないではいられない。まさに人間は、風にそよぐ葦なのである。

このことをしっかり納得して、自分ひとりが這い上がるうとあせるのではなく、生老病死を同じくする地球上の人類の安寧と幸福を求めることは、ただ倫理的な理想ではなく、21世紀の今日においては、社会的に必要不可欠な、選択の余地のない要請となってしまった。

カンタータ第122番《新たのみどりご...》では、神と人との和睦のために遣わされた、か弱いみどりごイエスを受け入れて、悲しみを終えよと呼びかける。小さく貧しい心こそ、弱肉強食の阿修羅の世を解き放つものなのだ。

カンタータ第214番《太鼓よ鳴れ...》は、《クリスマス・オラトリオ》の前身であり、ザクセン選帝侯妃・兼ポーランド王妃の誕生日祝賀の機会に、戦争(S)、学芸(A)、平和(T)、希望(B)の登場人物によって、神よりゆたかに授かりし賜物を備えた王妃の高い徳をたたえる。神の祝福は、この徳のゆえに、み空の星のもとに帰るまで王妃の上に注がれる。あの《クリスマス・オラトリオ》の淵源をなぞって、ひとの喜びと幸せを、多角的にさとせられる。

カンタータ第75番《貧しきものは食し》は、クリスマスのための作品ではないが、「貧しき者はさいわいなり」そのものを歌っている。富はたやすく心をけがし、魂の貧しさのみが、神のいのちの糧にあずかる。「貧しさ、富にまさる。」これは、負け惜しみの強がりではなく、長い膨張・増上のつらい歴史を重ねてきた21世紀の人類が、今ここにしみじみと実感をもってさとるべき真理ではないだろうか。人類はもはや生存の基盤となる地球そのものを、みずから失おうとしているのである。

カンタータ第191番《グロリヤ 高き天なる神に》。これもやがて《ミサ曲口短調》の中にグロリヤとしてとり入れられることになるラテン語の栄光頌を、カンタータに仕上げたものである。地には平和 これこそが人間の使命であり、宇宙の存続に身をゆだねる永遠の祈りとなる。

今回のクリスマス・コンサートは、バッハの作品を広く見通して、規模の大きい祈りの音楽を築くことができたと思っている。

## 第103回定期演奏会

日時：12月13日(土) 14:00開演

会場：杉並公会堂大ホール

...

カンタータ第122番 (新たのみどりご 小さきわがイエスは)

カンタータ第214番 (太鼓よ鳴れ ラッパよ響け)

カンタータ第75番 (貧しきものは食し)

カンタータ第191番 (グロリヤ 高き天なる神に)

...

ソプラノ 光野孝子 アルト 佐々木まり子

テノール 鏡 貴之 バス 小原浄二

オルガン 草間美也子

東京カンタータ室内管弦楽団 東京バッハ合唱団

指揮 大村恵美子 / 橋本眞行

...

チケット発売：9月中旬予定

## 合唱団、夏以降のスケジュール

野尻湖合宿と野尻湖演奏会

合宿：8月1日(金)から3日(日)

コンサート：8月2日(土)午後4時開演(6時終演予定)

[今年のコンサートは、開演時間を早めました。その後の移動が可能ですので、ぜひお出かけください。また、終演後の打ち上げ会にもご参加ください。ご希望の方は予約が必要です。お早めにお申し出ください]

秋の練習開始

9月6日(土)より毎週土曜

9月8日(月)より毎週月曜

第103回定期演奏会

12月13日(土)14:00開演、杉並公会堂

<演奏曲目>

BWV122《新たのみどりご 小さきわがイエスは》

BWV214《太鼓よ鳴れ ラッパよ響け》

BWV75《貧しきものは食し》

BWV191《グロリヤ 高き天なる神に》

第104回定期演奏会

2009年5月2日(土)14:00開演、杉並公会堂

<演奏曲目>

BWV11《ほめよ 神のみ国 - 昇天祭オラトリオ - 》

BWV71《主は わが君》

BWV52《悪しきこの世よ なれを頼まじ》

BWV76《主の栄光を 天は語り》

第5回ヨーロッパ演奏旅行 [自由参加]

2009年8月7日出発、15日帰国(7泊9日)

<演奏曲目>

BWV8《み神よ わが死はいづ》

BWV131《深みより 主よ われはなれを呼ぶ》

BWV191《グロリヤ 高き天なる神に》他